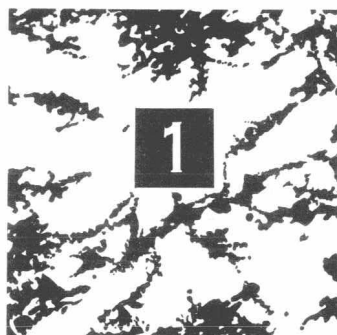


現代日本戲曲大系

1

現代日本 戲曲大系



三一書房編集部編

現代日本戯曲大系 第一巻 定価三八〇〇円
一九七一年四月三十日 第一版第一刷発行

編者 三一書房編集部

発行者 田川敬吾

発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話 東京（二九一）三二三一〜五

振替 東京八四一六〇番

郵便番号 一〇一

印刷所 第一印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

収録作品の上演については、必ず著者または
著作権継承者に了解を得て下さい。

現代日本戲曲大系／第一卷／目次

1946

なよたけ……………加藤 道夫 七
彦市ぼなし……………木下 順二 六
あきくさばなし……………久保田万太郎 九
冬の火花……………太宰 治 八
中橋公館……………真船 豊 二〇

1947

田宮のイメエジ……………川口 一郎 一五
風浪……………木下 順二 一三
林檎園日記……………久保 栄 一三
落日……………鈴木 政男 一四
廃墟……………三好 十郎 一五

1948

墮胎医……………菊田 一夫 一三
にしん場……………中江 良夫 一三

1949

夕鶴……………木下 順二 一五
春情鳩の街……………永井 荷風 一五
胎内……………三好 十郎 一六

解説		奥野 健男	四一
解題・付作品一覧			四七
演劇略年表（1946）1949			四七
装幀 坂口 顕			四七

凡例

○作品は初稿雑誌発表年月（但し活字発表のない作品は初演年月）を基準に、同年内では作者名の五十音順に配列した。なお、年号は西暦で示した。

○作品は原則として新漢字新かなづかいにあらためた。

○明らかな誤字・脱字は訂正したが、送りがな・表記の不統一は原文どおりにした。

○文中の*および注番号は原文に従い、該当作品末尾に注釈として付した。

○幕（場）数、登場人物・時・所の表記は原文どおりにした。

現代日本戯曲大系 第一卷 (1946~1949)

なよたけ

五幕

加藤 道夫

人物

『竹取物語』はかうして生れた。
世の中のどんなに偉い學者達が、どんなに精密な考證を楯にこの説を一笑に付さうとしても、作者は唯もう執拗に主張し續けるだけなのです。「いえ、竹取物語はかうして生れたのです。そしてその作者は石ノ上ノ文麻呂と云ふ人です。……」

石ノ上ノ綾麻呂
石ノ上ノ文麻呂
石ノ上ノ文麻呂
瓜生ノ衛門
清原ノ秀臣
小野ノ連
大伴ノ御行
讃岐ノ造
雨彦
なよたけ
こがねまる
蝗麻呂
けらを
胡蝶
みのり
衛門の妻（聲のみ）
陰陽師

侍臣

其他平安人の老若男女大勢
合唱隊（舞臺裏にて、低い吟詠調にて「合唱」を詠ふ。人數は少くとも三十人以上であること）

時

今は昔、例へば平安朝の中葉

第一幕

例へば平安京の東南部。小高い丘の上。丘の向う側には廣大な竹林が遠々と連なつてゐるらしい。前面は緩い傾斜になつてゐる。或る春の夕暮近く――
舞臺溶明すると、中央丘の上に、旅姿の石ノ上

綾麻呂と、その息子文麻呂。

遠く、近く、寺々の鐘が鳴り始める。
夕暮の色がよなく美しい。

綾麻呂 さあ、文麻呂。時間だ。

文麻呂 何故です、お父さん。未だです。

綾麻呂 ——聞いて御覽。(鐘の音)……あれは寺々が夕方の勤行の始まりをしらせる鐘の音だ。御覽。太陽が西に傾いた。黄昏が平安の都大路に立籠め始めた。都を落ちて行くものに、これ程都合のよい時刻はあるまい。此のひととき、家々から夕餉の煙が立上り、人々は都大路から姿をひそめる。その名も正に平安の、静けさ沈黙が街々の上を蔽うてゐる……

沈黙。あちこちから静かに鐘の音。

人目をはばかる落人にとつては、これこそまたとない機會だ。うつかりしてゐると、すぐ夜の帳が落ちかかるからな。暗くならない内に、私は國境を越して、出来ることなら、今夜のうちに滋賀の國のあの湖邊の町までは何とかして辿りついてやらうと思つてゐる。おや！ 彼處の善仁寺ではもう勤行を始めたらしい。……文麻呂、やつぱり時間だよ。

文麻呂 大丈夫ですよ、お父さん。まだ大丈夫です。第一、此の頃の坊主達のやることなんて何が當てになるもんですか？ 勤行の時間なんて出鱈目ですよ、お父さん。何處か一ヶ所でもいい加減にやり出すと、あつちの寺でもこつちの寺でもみんな思ひ出したやうに、唯

無定見に眞似をして鐘を鳴らし始めるだけです。正確の觀念なんかこれつぼちだつて持合はせてはゐないんですからね。お父さんとの大切な別離の時間が坊主の鐘の音で決められるなんて、そんなことつて……僕あ、……

僕あ悲しいな。(鐘の音)……でも、もうそんな時間なのかしら、一體？ (問) ねえ、お父さん。もう少しぐらゐいいぢやありませんか？ これつきり、もう何年も逢へないんだと思ふと、矢張り僕は名残り惜しくて仕方がありません。もう少しお話しませうよ。ねえ、お父さん、もう少し居て下さい。せめて鴉が鳴くまでならいいでせう？ 鴉なら本當に正確な時間を傳へてくれます。あれは自然そのものですから、全く偽りと云ふものを知りません。僕は自然と云ふものだけに信頼を置くんです。ねえ、あの切株に腰を下して、もう少し色々なことを饒舌り合ひませうよ。鴉が鳴くまでです。出發はそれからでも充分間に合ひますよ。本當に保證します。……さあ、お父さん、お願ひです。鴉が鳴くまで、せめて鴉が鳴くまでです。

時へ歸る鴉が三羽、大聲で鳴きながら二人の頭上を飛んで行く。

長い沈黙。

文麻呂 (低い聲) やつぱり、お別れですね。

綾麻呂 (しんみりと) ま、いづれは別れねばならない運命だつたのさ。

文麻呂 任地にお着きになつても、身體だけは

充分に氣を付けて、御病氣にならないやうに注意して下さい。

綾麻呂 む。

文麻呂 お父さんはお酒を召し上らない代りに、甘いものとなつてと眼がないから、一寸油斷をして食べ過ぎをなさると直ぐお腹をこはします。

綾麻呂 有難う。充分に氣をつける。お前も充

分健康に留意して、無理をしない程度に「文章の道」を一生懸命に研鑽するんですよ。一

日も早く偉くなつて、お父さんを安心させてお呉れ。お前は役所に勤めるのはどうも以前からあまり氣がすすまなかつたらしいが、いや、それならそれでもいい。お父さんは決して反對はしない。まあ、立派な學者になつて、「文章博士」の肩書でも貰つて呉れば、お父さんはそれだけでも大手を振つて自慢が出来来るからな。さうなれば、お父さんの受けた恥も立派に雪ぐことが出来るといふものだ……しかしね、文麻呂。お前はどうか、此頃

清原の息子や小野の息子達と一緒にやつて、やれ「和歌」を作つてみたり、「戀物語」を書いてみたりしてゐるらしいけれど、あれだけはお父さんどうしても氣に掛つて仕方がないな。第一、外聞が悪いよ。ああ云ふものは當世の情事好みのすることで武人の血を引く石上、綾麻呂の息子ともあらうものが、あんなものにかぶれるなどと云ふことは大體、體裁がよくないからな。殊に學問の道に勵むも

のにはああ云ふものは何の益もない代物だ。

「藝術」と云ふものか何と云ふものか僕にはよく分らんが、お父さんに云はせればあんなものは不潔だ。ああ云ふ「遊びごと」だけは今後は非共止めて欲しいもんだな。

文麻呂 (烈しく) 遊びごとではありません！

綾麻呂 (びつくりする)

文麻呂 (涙さへ含んで) お父さん、少くとも僕にとつちやあれは決して「遊びごと」ではないつもりです。僕達の「詩」があんな巷で流行してゐるやうな下らない「戀歌」のやりとりと一緒くたにされては、僕は……情無くなつて、涙が出て來ます。お父さん、僕は必つと立派な學者になつてみせますよ。お望みなら「文章博士」にだつてになります。唯、詩だけは作らせて下さい。「文章博士」が經書の文句の暗誦するだけなら、あんなもの誰だつてなれます。だけど、そんな知識を振舞したつて何になるでせう。そんな學問はただの裝飾です。いくら紅の綾の單^{ひとへ}襲^{きも}をきらびやかに着込んだつて、魂の無い人間は空蟬の拔殻です。僕達は此の時代の軟弱な風潮に反抗するんです。そして雄渾な本當の日本の「こゝろ」を取戻さうと思ふんです。僕達があんな下らない「戀歌」や「戀愛心理」にうつつてぬかしてゐるとお思ひになるんでしたら、それこそそれは大變な誤解です。今、僕達の心を一番捉へてゐるのは、例へばそれはお父さん、……これなのです。(懷から一冊の本を取り

出す)

綾麻呂 よろづのはあつめ……

文麻呂 萬葉集つて讀むんです。

綾麻呂 奈良朝のものだな？

文麻呂 お父さん。これこそ僕達の求めてやまぬ心の歌なのです。

綾麻呂 巧い歌があるのかな？ (黙つて頁を繰つてゐる)

文麻呂 讀んで御覽なさい。何處でもいいから、お父さん、ひとつ讀んで御覽なさい。

綾麻呂 (何氣なく聞いたところを讀み始める。夕日が赤々と輝き始める)

玉だすぎ 畝火の山の 榎原の 日知りの御代ゆ あれましゝ 神のごとこ 櫻の木

いやつぎつぎに 天の下 知ろしめしゝを 越えて いかさまに 思はしめめか 天さか

る 夷にはあれど 石走る 淡海の國の ささなみの 大津の宮に 天の下 知ろしめし

けむ すめろぎの 神のみことの 大宮は 此所と聞けども 大殿は こゝといへども

霞立つ 春日かきれる 夏草香 繁くなりぬる もゝしきの大宮處 見ればかなしも。

文麻呂 (嚴かに) 柿本朝臣人麻呂。過^き近^き江^き荒^き都^き時^き作^き歌^き。……

間——

綾麻呂 む。……

文麻呂 お父さん。そりや、僕だつて三史や五經の教訓の立派なことくらゐよく分つてゐ

ます。「李太白」だつて僕には涙の出る程有難い書物です。だけど、あの教義を唯斷片的に暗誦して博識ぶつたり、あの唐風の詩から小手先の技巧を模倣してみたりしたところで何になるでせう？ 要するに僕は、……自覺がなければ問題にならないと思ふのです。

間——

綾麻呂 文麻呂……お父さんは或ひは誤解してをつたかも知れん。此の本は、残念ながらまだお父さん讀んだことがないからよく分らんけれど、お前のやううとしてゐることはどうやら間違つてはをらぬやうだ。いや、さう云ふ心構へさへあるのならば、歌は遠慮なく作りなさい。けれども、眞の儒教精神もこれまた大切なものだから、經書の勉強も決して怠つてはいけません。如何にそれを日本的に生かすかがお前達の仕事なのだからな。……うむ、それはさうかも知れん。奈良朝時代の人達は、少くとも私達よりはもつとずつと純粹で、日本の心を知つてをつたかも知れんよ。いや、お前のやり方に就いては、もうつべこべ云はぬ方がよさうだ。自分の正しいと思つたことは、躊躇せず思ひ切つて最後までやり通すやうにしない。

突然、夕陽が迫り舞臺薄暗くなる。

おや！ 急に日が暮れてしまつた！ うつかりしてゐたら、夕日が朝日ヶ峯にかくれてしまつた！ こりや、ぐづぐづしてはをられな。少し長話をし過ぎてしまつたやうだ。

さ！ 文麻呂！ 愈々お父さんは行くぞ！

文麻呂（嚴然たる姿勢をとる）御機嫌よろしく、

お父さん！

綾麻呂 臣、石、上綾麻呂、今、無實無根の讒

言を蒙つて、平安の都を退下し、國司となつて東國に左遷されんとす。……文麻呂 いいか？ もう一度、返答だ！

文麻呂 はいッ！

綾麻呂 勳高き武人の家系、臣、石、上綾麻呂から五位の位を奪ひとつた我等が仇敵は？

文麻呂（凜たる聲）大納言、大伴、宿禰御行！

綾麻呂 巧みな贈賄行爲で人々を手馴づけ、

無實の中傷で藏人所の官を奪ひ、あまつさへその復讐をおそれて、臣、石、上を東國の果に追ひやつた我等が仇敵は？

文麻呂 大納言、大伴、宿禰御行！

綾麻呂 或ひはまた、その一人息子、文麻呂の出世を妨げんとて、大學寮内よりこれを追放し、より條件の悪い別曹、修學院などへと轉校せしめたる我等が仇敵は？

文麻呂 大納言、大伴、宿禰御行！

綾麻呂 よし！ 吳々も我々の受けたあの侮辱だけは忘れないやうにしないさよ、不潔な血を流すことはたやすいことだが、我々はそんな他愛もない復讐はいさぎよしとしないのだ。お前は平安の都に残つて、孜々として勉強に

はげみ、立派な學者となる。私は東國の任地に赴き、武を練り、人格を磨いて、立派な武人となる。さうして、何時の日にか二人がま

た此の地で相まみえる時があるとすれば、その時こそ、大伴、御行は必ずや地下人かさもなければ、それ以下の庶民にまで失墜するであらう。……（中央を向き、感慨深々）あゝ、平安の都もどうやらこれで暫くは見納めなのだ。……さて、何時迄ぐづぐづしてゐても極まらない。では、文麻呂、僕は出掛ける！

文麻呂 ぢや、お父さん！ お氣をつけて！

綾麻呂 お母さんのお墓参りだけは決して缺かさないうやうにしないさいよ！ ぢや、元氣で勉強しなさい！ それから、瓜生、衛門だが、あれはもう大分年をとつてしまつたから、あまり役には立たんだらうが、ま、よく面倒をみておやりなさい。あれだけは何時も變らぬ我々の忠實な従僕だ。あゝ、忘れてゐた。これ。萬葉集……

文麻呂 いえ、それはお父さんに差上げます。僕はもう一冊持つてゐますから。東國の任地などで沁々とお讀みになるにはこれ程よい書物はあります。

綾麻呂 さうか。それでは記念にひとつ貰つておかう。これは中々よささうな本だから、お父さんもじつくり讀んでみることにしよう。それから東國へ下る人があつたら、必ず手紙を呉れるんですよ。あゝ、大分遅くなつてしまつた。山科の里では供奉の者達がさぞや待ちかねてゐることだらう。では、文麻呂。さばぢや！

文麻呂 さやうなら！ お父さん！

文麻呂 誰だ！

綾麻呂 誰だ！

綾麻呂 誰だ！

綾麻呂 誰だ！

綾麻呂 誰だ！

綾麻呂 誰だ！

綾麻呂 誰だ！

綾麻呂 誰だ！

綾麻呂 誰だ！

石、上綾麻呂、左方へ下りて行く。退場。

文麻呂 獨り中央丘の上に残る。

あたりには夕闇が立ち籠めてゐる。……文麻呂は傍の木の切株に腰を下ろして、冥想に耽り始める。……

遠近の廣大な竹林の竹の葉のざわめく音が無氣味に響き渡りはじめる。……

文麻呂 きよつとして後をふりみる。

風。……そして、時折、山鴉の物淋しげな鳴聲がし始める。

文麻呂（獨白）風か！ ……

文麻呂は何やら急に耐へ難い孤獨感に襲はれるのであつた。懷より横笛を取り出して、親しい「曲」を奏し始める。澄んだ笛の妙音、風に傳はつて、餘音嫋々……舞臺、暫くは横笛を奏する文麻呂。

文麻呂、突然、何か不思議な豫感に襲はれたもののやうに唇から不圖横笛を離す。耳を澄ます。——何處からともなく、こだまのやうに同じ曲が響いて、……消える。文麻呂、不思議な笛の反響を解せぬ態度で、もうひとしきり吹いて、再び突然、唇から笛を離してゐる。耳を澄ます。——矢張り、何處からともなく、同じ曲が響いて、……消える。文麻呂、もう一度今度は思ひ切り強く吹いてゐる。——矢張り、何處からともなく同じ音が反響する……

文麻呂（不氣味な氣持に襲はれて、すつく、と立上り）誰だ！ ……

誰だ！ ……

誰だ！ ……

誰だ！ ……

誰だ！ ……

誰だ！ ……

誰だ！ ……

誰だ！ ……

清原 石ノ上、文麻呂ではないか？

文麻呂 (びくんとして振向き) なんだ、清原。……君だつたのか？

清原 大學寮學生、清原秀臣。……僕だ。

文麻呂 一ヶ月前だつたら此の僕も同じ「名乗り」を堂々と名乗り返せたのになあ。……残念ながら、今では、別曹、修學院學生、石ノ上、文麻呂……か。

清原 おい、石ノ上。そのことだけは何時迄もさうくよくよ氣に掛けるのは止めて貰はうぢやないか。學校がどうのかうのと云つたつて、正しい文の道は唯一つさ。小野連にしる、此の僕にしる、君とは一生を誓ひ合つた同志ぢやないか。その線言だけはもういい加減に止め給へ。……ところで石ノ上。お父様は？もう發たれたの？

文麻呂 あゝ、いまさつき。……此處で別れたところなんだ。何だか、今夜中に三井寺を過ぎて、滋賀の里までは是が非でも辿り着くん

だなんて、とても張り切つてたよ。

清原 そりや大變だな。殊に夜道になると逢坂山を越えるのは一苦勞だぜ。……でも、何だつてよりによつて夕方なぞにお發ちにならうなんてお考へになつたのかな。

文麻呂 人目を忍ぶ旅衣と云ふ奴さ。でも、親父、あれで内心東國にはとても抱負があるらしいんだ。まあ、別れる時は割合に二人共さつぱりしてて、氣が樂だつたよ。山科の里まで行けば、供奉の者が澤山待つてゐるさうだ

から……

清原 さうか。それなら安心だ。……いや、實は、妙な所で君に逢つたんで、びつくりしちやつてね。

文麻呂 僕もびつくりした。斯んな處にまさか君が來やうとは思はなかつたからな。僕は君をこだまと間違へてしまつた。……

清原 え？

文麻呂 こだまさ。例へば、そら、向うの竹山から春風に乗つて反響して來るこだまと間違へたのだよ。竹の精と間違へてしまつたのさ。清原 竹の精？

文麻呂 うん。ま、竹の精とでも云ふんだらうな。何だか、そんなものが此邊なら現れさうな氣持がしたんだ。此の丘へ登つてみたのは、實は僕は今日が初めてなんだがね。兎に角、すつかり氣に入つてしまつたよ。……平安京も此の通り一目で見渡せるし、それに、どうだい、こつち側の、此の夕風にざわめいてゐる素晴らしい竹林の遠々たる連なりは！僕は先刻親父と話しながら此處まで登つて來た時には、何だかまるで、突然夢の國に來たんぢやないかと眼を疑つてしまつた。平安の都で世迷ひ事を身をやつしてゐる連中の中で、此の丘のこつち側の世界の素晴しさに氣の付いてる奴は、一體何人あるだらうかね？それにほら、見給へ。直ぐあすこにまであんなに深い竹林が續いて來てるなんて、實際、今迄僕は夢にも想像してゐなかつた。全く、此

の丘から向うは別世界だ！あの墮落した平安人の巷からものの半道も離れてゐない此の丘の上には、まだ汚れない自然が、美しいそのまゝの姿で脈打つてゐる様な氣がする。そんな氣がするんだ。……清原。聞いて御覽。……山鴿だ。

竹林の方から山鴿の鳴聲、ひとしきり。二人共、暫く沈黙。

清原 (靜かに) 石ノ上、……君は今竹の精つて云つたね？君は竹の精の存在を信じるか？

文麻呂 どうしてだい、そりやまた？

清原 (眞剣な顔) 石ノ上、僕は、……僕はその竹の精を見たのだ！

文麻呂 見た？

清原 見た。此の眼ではつきりと見てしまつたのだ。自然そのまゝの汚れない清純な女性の形象をとつて此の現世に存在してゐる、いはばそれは若竹の精靈だ。微塵の惡徳もなく、美はしい天然の姿のまゝで、それはあの竹林の中に生きてゐる。

文麻呂 (じつと友の顔を凝視め、ややあつて) 「戀」

だな？ 清原……

清原 人の世の言響がさう名付けるならば、それもよからう。……石ノ上、僕は白狀する。

……僕は、……僕はその戀を知りはじめたのだ。

間――

文麻呂 (そつと友の肩に手を掛けて) よからう、清原。僕は決して咎め立てはしないぜ。いや

寧ろ君のその碧空の如く清淨無垢なる心を捉へた女性の顔が一日拜みたい位だよ。……戀とは夢だ。……「夢」とは全き放心だ。その正しい極限では一切が虚無となる。一切が存在しなくなる。それは未來永劫を一瞬に定着する詩人の凝視を形成する場所だ、眞實の詩とは其處に生れるのだ。その虚無の場を不安と觀するべからず、法悦の境と信ずべし、だ。其處に生ずる悲哀よりも歡喜よりも、何よりも其處に存する眞實の詩をこそ尊ぶべきだ、と僕は思ふ。……清原、戀をし給へ。一切を捨てて戀に酔ひ給へ。

清原 有難う。

文麻呂 敷島の日本の國に二人ありとし念はば何か嘆かむ、だ。……知つてゐるかい、清原。

清原 む。……萬葉、卷十三、相聞の反歌だ。

文麻呂 戀とはああ云ふものだ。僕はさう信ずる。戀とは唯一一つの魂を烈しくもひそかに呼び合ふことだ。僕はさう信ずる。あの巷にあれすさんである火遊びの嵐はどうだ。あんなものは何が戀だ。あんなものは不潔な野合だ。……汚らはしい情遊だ。

清原 石、上、……僕の場合に限つて、あんな汚れた氣持は微塵もないつて云ふこと、……

君、信じて呉れるだらうね？

文麻呂 うん。信じる。信じよう。信じないでは居られないのだ。君が本當のものと嘘のものとを識別ける眼を持つてゐることだけは、僕は心から信じてゐるんだからな。

清原 (次第に涙を催す感傷的な氣持になつて行く)

……石、上、僕は、そのうちに君にもあの女に一度逢つて貰はうと思つてゐる。

文麻呂 何て云ふの？ 名前は。

清原 ……なよたけ。

文麻呂 え？

清原 なよたけ。(舞臺左手奥の竹林の方を指し) あすこの竹林の向うに住んでゐる……

二人共 そつちの方を眺めてゐる。

文麻呂 田舎娘なのかい？

清原 竹籠作りの娘なんだ。年取つた父親と二人暮しの貧しい少女さ。……まだ、まるで少女なんだ。汚れ多い浮世の風には一度だつて觸れたことのないやうな。……何て云ふのかなあ、かう、まるで、……

文麻呂 いくつ？

清原 え？

文麻呂 年さ。いくつ？

清原 ……知らないんだ。

文麻呂 何だい。訊いてみないの？

清原 ……まだなんだ。

文麻呂 ……まだなんだ。

清原 ……まだなんだ。

文麻呂 ……まだなんだ。

清原 ……まだなんだ。

文麻呂 ……まだなんだ。

清原 ……まだなんだ。

文麻呂 ……まだなんだ。

清原 ……まだなんだ。

文麻呂 ……まだなんだ。

清原 ……まだなんだ。

文麻呂 ……まだなんだ。

ろ？ え？

清原 (極く低く) まだなんだ。

長い沈黙。

文麻呂 (暫らくは呆れた様な顔をしてゐたが) さうか。……まあ、いいさ。……つまり、まだは

んの「戀知り初めぬ」と云つたばかりの所なんだな。だけどね、清原、戀をするにはもう少し勇氣を持たなくちゃ駄目だよ。もう少し思ひ切つてやらなくちゃ駄目さ。僕はさう思ふな。この女こそ自分の一生を賭けた唯一無

二の女性だと云ふ確信がついたら、早速、自分の心情を率直に打明けなけりや問題にならないよ。遠慮なんかしてたら何時迄経つたつてらちがあかない。勿論、僕はあの當世流行

のつけぶみと云ふ奴は大嫌ひだ。こそこそそれで悪いことでもしてやるやうに、巧くもない

文章を紙に書き並べて、逃腰半分で打明けるなんてのは、第一、男らしくもないし、……

それに卑怯だ。勿論、面と向つて、堂々と口で打明けるんだ。……そりや、さうだぜ、君

何時迄もぐづぐづそんな態度を續けて行つたとして御覽。折角の戀も水沫の如く消え去つてしまふのだ。例へばね、先方でも君のこと

を慕つてゐるとする……いいかい？ ……何時迄も君が愛を打明けて呉れるのを待つてゐる……待つても待つても打明けて呉れない。

……そのうちに他の戀敵があらはれて、先に結婚を申し込んでしまふ。ね？ 君はもう破

滅だ。……君の「戀」は永久にそこで終つて

しまふかもしれないのだ。

話の途中から、空には星々が燦然と輝き始めた。……

文麻呂はそつと清原秀臣の反應を窺つてみる。彼は黙つたまき、俯向いてゐる。不圖、遠くの竹林の中から、まるでざわめく風の中からも生れたかのやうに、わらべ達の合唱する童謡が、美妙な韻律をひびかせながら、段々と聞えて来る。……

〔わらべ達の唄〕

なよ竹やぶに 春風は

さや さや

やよ春の微風 春の微風

そよ そよ

なよ竹の葉は さあや

さあや さや

文麻呂 (怪訝な顔で、唄の聞えて来る方向を不気味さうに見やり) ……清原。……あれは何だい？
何だらう、あの唄は？

清原 (異様な脱びに既に眼は煙々と輝き始めてゐる。熱情的な獨白) わらべ達だ。……なよたけのわらべ達だ。……なよたけがわらべ達と一緒に散歩に出て來たんだ。(突然、驅けて行かうとする)

文麻呂 清原！

清原 (立止る)

文麻呂 何だつて云ふんだい？ わらべ達がどうしたつて云ふんだい？

清原 (もはや全く氣もおろろに、譴言の如く) わら

べ達はなよたけの心の友達なのさ！ なよたけが心を許してゐるのはわらべ達だけなのさ！ わらべ達はひとりひとりなよたけの心を持つてゐるんだ！ わらべ達の心はなよたけの心なんだ！ 僕はなよたけと話が出來なかつたつて、わらべ達とは話が出來るんだ！ なよたけは僕に話掛けて呉れなかつたつて、わらべ達は僕に話掛けて呉れるんだ！ 僕がわらべ達と話をしていると、なよたけは傍で微笑みながら、僕とわらべ達の話を聞いてて呉れるんだ！ 僕はわらべ達と話をすれば、まるでなよたけと話をしているやうな氣持なんだ！ わらべ達の話の中にはなよたけの心が通つてゐるんだ！ なよたけの心の中にはわらべ達の話が通つてゐるんだ！ 僕はわらべ達と話してゐるんぢやなくて、なよたけと話してゐるんだ！ なよたけは僕に……

文麻呂 清原！ 落着け！

聞——

清原 (稍々理性をとり戻す) ……石、上。……僕は取亂しちまつてゐる。戀のためにすっかり取亂しちまつてゐる。許して呉れ。……僕は行かなくちやならない。直ぐに行かなくちやならない。なよたけに逢ひに行かなくちやならない。なよたけが僕を呼んでゐる……

文麻呂 (きつぱりと) 行き給へ！

清原、脱兎の如く、稍々左手奥へ驅け下りて行く。

文麻呂 (清原の後姿を見送りながら、獨白) 清原……

貴様は、完全に……「戀」の虜だ。……

燦然たる星空を背景に丘の中央に、影繪の如く立つてゐる文麻呂。

わらべ達の謠ふ童謡が段々と明瞭に聞えて来る。……

〔わらべ達の唄〕

なよ竹やぶに 山鴿は

るら るら

やよ春のとり 春のとり

るら るら

なよ竹の葉に るうら

るうら るら

春風にざわめく竹林の音と、わらべ達の謠ふ愛らしい童謡の旋律と、時折淋しげに鳴く山鴿の鳴聲が、微妙に入り交り、織りなされ、不可思議な「夢幻」の階調となつて、舞臺は暫くは奇妙に美しい一幅の「繪圖」になつて呉れればよい。文麻呂は何か我を忘れたもののやうに、じつと遠く竹林の方を見てゐる。……

やがてわらべ達の唄聲が次第に遠く消えて行く頃、瓜生衛門右手より現れる。丘の上の人影をそつと窺ふやうにみえてゐる。

瓜生衛門 (文麻呂だとすると、低い聲で) 文麻呂様……文麻呂様……

文麻呂 (その聲に不圖我に返り、あたりを見廻すが、暗くてよく分らない。空耳かな、とも思ふ)

瓜生衛門 お坊ちやま……此處ですよ。こちらでございませう。

文麻呂 誰だ！

瓜生衛門 私でございませう！ 瓜生衛門でございませう！

ざいます。

文麻呂 なんだ、衛門か。……お前だつたのか？ びつくりさせるぢやないか、こんな處に……

瓜生、衛門（笑ひながら、近寄つて行く）やつと見付けました。随分方々お探し申したんですよ。

……お父上はもう？

文麻呂（丘の上から下りて来る）む。行つてしまはれた。……元氣に發つて行かれた。

瓜生、衛門 東路はさぞ淋しうござりませうな。

……手前もお供致し度うございました。……でも、供奉のものはみな大件様の御所存だつたので、残念ながら、……致し方ござりませぬ。

文麻呂 む。あの供奉の連中ね。……まあ、あれは大納言の決めた人達なんで、心配でないこともないんだが、……併し、父上のあの高邁な「人格」はたとへどんな腹黒い奴等でも、たちどころに腹心の家來にしてしまふよ。僕はさう信ずる。……ねえ、衛門、さうだらうが？

瓜生、衛門 さうでございますとも。……瓜生、衛門、今更ながら御父上から受けました四十年の御厚宜、つくづくと身に沁みまする。……（涙して）しがな瓜作りの山男を……これまでに……

文麻呂 まあ、いいさ、衛門。過ぎ去つた過去のことを思ひ出してくよくよするのは、遠い先の未來のことを妄想して思ひ上るのと同じ

くらゐ愚劣な空事だからな。一番大切なのは現在だ。現在の中に存在する可能性だ。……ところで、衛門。お前、これから、どうする積り？

瓜生、衛門 手前、生れ故郷の瓜生の山里に歸つて、また瓜作りでも始めようかと思ひます。

文麻呂 え？

瓜生、衛門 また瓜でも作らうと思ふのでございます。此の上、お坊ちやまに御厄介をお掛け申すのは、此の衛門、とても忍びなうございますでな。それに、お坊ちやま。（柄になく恥しさうに笑ふ）へ、へ、へ、へ、へ、……文麻呂 何だい。氣持が悪いね。……それに？

……どうしたつて云ふんだい？

瓜生、衛門 へえ、誠に氣恥しくて申し上げにくい話なんでございますが、……實は手前……瓜生の里には四十年前に云ひ交した許婚がひとり待つて居るんでございます。

文麻呂 許婚？

瓜生、衛門 へえ、まあ、そのやうな……へ、へ、へ、へ、……

文麻呂 おい、おい。衛門。お前も中々隅には置けないね。六十八にもなつて許婚とは……さすがの僕も恐れ入つちやつた。それぢや、まあ、惚け話の花でもひとつ咲かせて貰はうかい。

瓜生、衛門 いや、お坊ちやまの方から先にさう開きなほられると、折角の花も蕾んでしまひます。……實を云へば、手前、若氣のあや

まち、とても申しませうか、……今から四十年前の昔でございます。手前がまだ瓜作りをやつてをりました時分、不圖した浮氣心から云ひ交した娘がございました。と云ひましても、名前も顔もはつきりとはとても浮ぶ瀬もない冥途の河原。……何分遠い昔の想ひ出話でございますでな。手前は父上様にお仕へ申す身になつて四十年。……華やかな平安のみやびの中であのやうにしあはせ過ぎる位の上でございましたもので、そんな娘のことなぞすつかり忘れてしまつてをりましたのです。ところがつい最近のことですが、風の便りか山ほととぎす……お坊ちやま、實はその娘がまだ手前の歸つて来る日をたつた獨りで待つてゐると云ふ話を不圖、耳に致しましたのです。それを聞きました時には、丁度、今度のお父上の御榮轉騒ぎで、都のお勤めからは手前も愈々身を引潮の漁り歌と云ふわけで、……何となくすずるな憂身をやつしてをりました最中だつたもんで、何と申しますか、……人里離れた故郷の瓜生の里が無精にかう……懐しくなつて参りましてな。

文麻呂 ふーん？ さうだつたのかい。……いや、さう云ふことなら衛門、そりや僕もとてもいいと思ふよ。僕も大賛成だ。……故郷の山の中で一生を契り合つたひとと二人つきりで瓜を作る。……いいな。羨しい生活だ。幸福な餘生だ。衛門、……こんな汚れ多い都會の生活はもうお前のやうに正直な男には用の